

般若心経を
補強する part2
Ver. II の2

空不動

2016/11/ 4 更新

【序文】

般若心経の解説は既に前著で示しました。

そこで本著では 前著を理解した人が さらに理解を深めるために 般若心経を補強する目的で 「般若心経を補強するPart 2」を著し その中で重要事項を追加しました。

そこでこの書では 般若心経の本文にはおさまり切れない しかし般若心経に密に関連している著者の体験をも含めて纏めました。

【第一節】世界観の補足と そこから導かれる行動の原理

【色・受想行識に関するモデル】。

本書では 長く永遠不滅の存在として語られてきた「霊」又は「霊体」という概念を強く意識して「生命体」という概念を持ち込みました。

そして 色・受想行識に関して「生命体」と その「精神作用」とを対応させて説きました。

ところで さらに「生命体」と「肉体」との関係の詳細に説くには「霊体」と「肉体」の間をつなぐ「魂魄」の概念を導入しなければ成りません。

以下に「霊体」と「魂魄」に戻って詳細を説明しますが これはあくまでこの節の中だけの解釈と定義として置きます。

般若心経解読の中では「霊体」の語句も「魂魄」の語句も敢えて遣っていません。

【フラクタル変換装置としての魂魄】

ところで 本文では人間の構造を空中の色・受想行識と空外の色・受想行識と分類して述べてきましたが「霊体」と「魂魄」との分類はこれまでの分類との対応関係でも示す事が出来ます。即ち「霊体」は「生命体」としての色・受想行識の両方を含み「魂魄」は色・受想行識と色・受想行識とをフラクタル結合する機能をもつフラクタル変換装置であると言えるでしょう。

「魂魄」とは 宇宙時代の現代にふさわしい比喻で言うならば これは宇宙服です。宇宙服は通信装置や生命維持装置を備えていて 地球とは異なる宇宙環境での活動において必ず必要となるモノです。

霊体が次元を越えて空の世界から「現象」と「事象」の世界に降りてくるには 霊体を活動する環境にマッチングするための宇宙服が必要です。つまり ここで宇宙服とはフラクタル変換装置なのです。

用途の異なる二層の宇宙服は「天上界用」と「地上界用」の二層です。天上界用の宇宙服は「魂」ですが 地上界用の宇宙服としては「魂と魄」の両方です。

大まかに言って「魂魄」の「魂」の部位は色と受想行識が天上界で活動するための宇宙服であり「霊体」の表面層として生き続けます。

死後「魄」は受想行識から切り離し 記憶と共に 地上界と天上界の境界域に残します。事象の記憶として頭脳にあるのはごく一部で すべては諸法の管理のもとに置かれます。

生まれ変わりを含めて 天上界から再び地上界に係わる必要があるときにはいつでも使える状況にしておきます。

「魂魄」とは「生命活動の場」にマッチングするために 色と受想行識のための宇宙服として存在しているのです。

より正確には 魂魄はさらに幾層にもなっていて それぞれの働きが存在していると言えます。

般若心経の中での対応を確認すれば「魂魄」は色と受想行識のための宇宙服として 色と受想行識の表層の一部分として 定義することが可能です。

さらに この延長の流れで説明すれば 「色と受想行識」は一番表面の最終の「宇宙服」と言えますが そう言うよりは法から創り上げた「宇宙船」にたとえるのが適切と思います。人は死によって 宇宙船の設計図（DNA）のみを子孫に残し 宇宙服を一枚脱いで 天上に帰ります。

【安心して死を迎えるために】

誰にとっても死は未体験なので 心配や不安が付きまとうモノです。そこで死後の世界の話や 臨死体験の話を経ても 中々安心までは行かないモノです。しかし 五蘊皆空ですから そして観音様は愛ですから 死後の心配は全くしなくても良いのです。

死とは 《宇宙の理念》に沿って 超巨大な力によって 住む世界の次元の転換が成されるのですから 観音様に 心底から身を委ねてしまいましょう。死という次元の転換には幾つかのプロセスを経過しますが 今からそれを知る必要は無く 観音様に抱かれて 幾つかのプロセスを成されるがままに 成されていくのです。

さてここで重要な意味を持つのは「現象」ではなく「事象」であることに注意しましょう。

そこに見えるモノが三途の川であっても お花畑であっても 大きな光の輝きであっても・・・ それは「現象」であり 「現象」は各自の体験した「事象」の意味の表現ですから 次元移行としての意味合いは共通なのです。ここでは「事象」こそが重要で 「現象」は「事象」の一部を象徴的に表現しているのであり 表現は複数有っても 「事象」の意味合いは同じなのです。

つまり移行先の世界は 経過の「現象」にではなく 「事象」にこそ主たる意味があるのです。

死後 誰もが直ちに「空」に戻れるわけではありませんが 般若波羅密多に帰依する意志を持ってさえいれば 次元の移行はフラクタル共鳴の中で成されることとなります。つまり 死とは 時空を超越して生き続ける「生命体」にとっては 永遠の旅の途中の一つの出来事にしか過ぎないと思えてくるのです。

般若心経から読み解けることは以下の通りです。

地上の生活の中で 日頃から常に観音様に帰依の意志を示していれば 観音様が 必ず「空」の世界まで導いて下さるのだ という解釈が生まれてきます。

どこまでも五蘊皆空なのです。だから安心なのです。つまり 五蘊皆空を体得すればこの世界に生きるままで 安心立命を得られるのです。

これは般若心経だから観音様なのであって それはあなたがこれまで信仰してきた神であっても それからあなたが親しみを持っている 「空」を体得した過去の聖人であっても それは良いのです。何とかの神でなければ救われない などということは絶対にありません。

要は 今はどうあれ 自らの意志で 般若波羅密多の中に入ろうとする意思こそが重要なのです。常に 意思は尊重されるからです。

【空を共有してこそ 生命活動は成就する】

さて色とは 空の全要素をもって空から分かれた「霊体」であり 受想行識は肉体の受想行識とを フラクタル結合するための フラクタル変換装置であり 霊体の精神作用なのでした。

空を共有し 空の全要素を持つ色・受想行識が フラクタル変換装置を使ってフラクタル結合し 色・受想行識と次元を繋ぎます。

しかし 人類として別れた沢山の色・受想行識は 当初それぞれが 個の論理のみに傾倒し 互いに矛盾した事象を生み出してしまいます。或いは一人の人間としても 自己矛盾した事象を沢山生み出してしまいます。

そこで いっとき肉体にとどまっている内に それらの矛盾を解消することが一つの課題となり 個々の人間の修行となるのです。

つまり 空の世界を思い出しながら 空の世界と同じように 一体になって協力し合い フラクタル共鳴を深めつつ 進歩と調和に満ちた世界を創っていくのが人間に与えられた課題であり 修行なのです。

ですから 同じ物質的環境で有りながら 一瞬でそれに係わる人の数だけの『事象』が生まれ それらの『事象』がフラクタル共鳴に向かうための道があり その道には様々な種類が有り。それらが互いに影響し合って多層化し 似た様なフラクタル共鳴が集団を作り 離合集散しながら 生きているのが人類の生命活動なのです。

そしてこれが五蘊皆空であり 全肯定された世界であるということになります。

【五蘊皆空から導かれる「自然の論理」。そのキーワードは「誠実さ」である】

このような多重で多層のフラクタル共鳴が善悪を超越した全肯定の世界なのですが 現実には人間的尺度で その部分だけを取り出して 拡大してみれば相対化した善と悪の世界が発生しているように見えるのです。

ですから・・・ これは大事なことなのですが 全肯定といっても その出来事をそのまま良しとして 肯定することではありません。全肯定とは 今そのときに それがそこに有ることを 必然と見ていることなのです。その上で《宇宙の理念》に立ち 批判するべきはきっちりと批判し 拒否すべきは明確に拒否しなければ 人間の深化を遅らせることになります。遅らせるだけでなく 大混乱を招くことになりかねません。

ある種の複合された出来事は 深化の進んだ事象と 遅れた事象が共存しているために 人間的尺度からみて 神と悪魔が対立するようにも見えています。そして 悪魔と見えるエネルギーが 人一人の人生を翻弄させるだけの力は持っているのです。

ですから 全肯定の世界であっても 実質的には善と悪は十分な意味を持っているといえるのです。

ここで 人間的尺度からは 般若波羅密多の瞑想と行により フラクタル共鳴

状態が深まるにつれて その場の事象の世界では 善の努力によって 悪が昇華され 次第に消滅していくように 実感されて行くのです。

たとえ 善と悪の対立とまで言わなくても 修行中のあなたが係わるその事象に積極的に介入することが「誠実さ」なのです。

もし その時機が来ていなければ 直接介入しないで ただ祈って フラクタル共鳴のエネルギーを伝え続け その時機を待つことが「誠実さ」なのです。

何らかの事態に直面した時に 《宇宙の理念》に基を置くフラクタル共鳴の立場から 目の前の事態に係わることにより 事態は改善されていくのです。フラクタル共鳴の立場に立てば この場面で自分が動くべき否かは 判断できるようになるのです。それは 自然に成されなければ成りません。

五蘊皆空ですから 自分がその場面に居合わせたことに 必然性があるのです。ですから もし係わるべき場面で 自ら係わることを拒否し そのまま放置したとしたら それは五蘊皆空のいう 全肯定ではありません。大きな失態と言えるでしょう。何もしなければ それは怠惰であり いくら全肯定したつもりでもそれはたちまち不誠実となり 事態は好転せず 混乱に向かいます。

何もしないことで自分を守ろうとしたのだとしたら それはもう 怠惰の極みで それがもし 重大局面であるならば それは犯罪に匹敵します。

このような 何もしない生悟りは大なる害毒なのです。厳しくすべきところで優しさしかできない人も生悟りです。このような 生悟りに成らないためのキーワードはやはり「誠実さ」です。

肉の身の人間としては そのことに誠実に係わり 肯定するときは肯定して 同意を示し 否定するべきはきっぱり否定しなければ成りません。

この時 人は《宇宙の理念》に立って この場面での「誠実さ」とは何かを判断しなければ成りません。そしてその「誠実さ」を貫くために あるときは戦うことを選択し 自己を犠牲にしても 全体の利益を守る行動が求められているのです。

指導者は このような究極の場面での判断が常に求められているのです。

それ故に 指導者は「想念切り離し」の「行」を成就し 諸々の呪縛から解放されていなければなりません。

《宇宙の理念》に到達するほどの徹底した般若波羅密多への帰依と ここに示した真の世界観から導かれる「誠実さ」を求められているのです。このフラクタル共鳴の中での無作為の誠実な行為を「自然の論理」といいます。

「自然の論理」が出たところで 纏めておきましょう。

普遍の世界観に到達すれば そこから直接導かれるように普遍の「理念」が生まれます。それは不文律であっても良いと思います。その「理念」の下に 世界観に相応しい「行動方針」ができあがってきます。それが「自然の論理」です。この「自然の論理」はこの普遍の世界観と密接な関係があり 必然であるのです。

現実を指導者として生きるには 自ら「想念切り離し」の「行」を成就し 想念の呪縛から解放され この「自然の論理」を体得していることが必要になります。

【天上界では 地上界での 現象と事象の関係が逆転している】

ここで先ず 誰もが当然と思うことの確認ですが・・・ 地上界では 一つの事象に係わる人から見て 現象の世界はすべて共通であり その現象に係わる事象の世界はその人間の数だけあります。まあ これは 言われるまでもなく ごく当たり前のことです。

ここでは 係わる人間の思考によって 断片的な事象の世界を 際限なく生産していくことになります。

当然 この事象はエネルギーを持っていますから 現象に影響を与えていきます。現象の根元には 量子論的に取り得る状態の確率によって決定する部分があり 事象はこの量子状態の確率に作用して その後の現象の推移に 影響を与え続けます。

先に述べたように 私達の住む地上界は 先ずは現象が有って その現象に係わる事象が沢山存在する世界のように見えます。ここでは事象とは現象にまつわりつく雲みみたいな存在と見えています。

ところが 天上界では 先ず「心の姿勢」が有って そこから事象が発生し その事象を具現化するための現象が沢山有るのです。つまり 似たような事象を生み出す思考が 塊となって 言い換えれば 似たような人達が集まって 一つの事象を形成し それを形に表現する現象が沢山生成されているという 地上界の現象と事象との関係の逆の関係となります。

そして この地上界の体験は天上界での現象を生成するのに大いに貢献することになります。これはまさに パラレルワールドなのです。

【色の新旧モデル】

色は単数形で 或いは固有名詞として表記されていて その事は一つ二つと数えられる存在ではなく 空の全要素を含んでいて 固有の密度分布を持っている存在であることを示しているのです。この真実から 人類は空において 一つであることが導かれます。つまり 空こそ愛の源泉であると言えます。

この真実は 世界の恒久平和を考えるときに重要な真実となります。

さらに この真実は 色と守護の神霊とを 線を引いたように切り離して考えることは出来ないことを意味しています。

さて キリスト教では 父と子と精霊との関係を 三位一体として説いていることは注目すべき事です。

これは 空と色・受想行識と観音様との一体なることを示すことに限って 見事な表現として評価すべきです。

ところで キリスト教ではイエスのみが「神の子」として説かれています。しかしながら コンスタンチヌス帝の時代にキリスト教はローマの国教となりますが。西暦325年に始まるニカイア会議での聖書編纂以降に 異端として排斥されたキリスト教グノーシス派が伝承してきたトマスの福音書によれば 「人はイエスキリストと同じように 神の子と成れる」と説かれています。さらに 「自分自身を知ることによって成れる」と説かれています。この隠れた重大な真実を受

け入れれば キリスト教における世界観の大枠が大修正され この時 三位一体は まさに真実のものと成るのです。そして この事で キリスト教は普遍性を取り戻すことになるのです。

便宜上 前著（暗号は解読された般若心経・改訂版）のモデルでは色と受想行識とを それぞれ守護の神霊と「自らの本体」として分離して表現しましたが 本書のモデルでは守護の神霊を色に含め 受想行識を色に係わる精神作用として表現しました。

この本書の分類の方が 色・受想行識は色と受想行識に対応しつつ フラクタル結合する表現となり より適していると現時点では考えています。

ですから このモデルでは 観音様が守護の神霊の代表として 色・受想行識に含まれていると解釈します。

そうであれば このモデルにとっては 玄奘三蔵が追記して示した度一切苦厄により 衆生救済の働きとしての観音様の存在が急に重要になってくるのです。

そしてもちろん 守護の神霊も観音様も本質は人間と同じであり 空の全要素を内に秘めた 色と受想行識として扱うことが出来るのです。

【色・受想行識が色・受想行識と深いフラクタル共鳴関係にあるのが 人間の理想であること】

ところで 宗教によっては 人間も神も 区別が無く描かれていることがあります。その場合

神は 色・受想行識であって しかも同時に色・受想行識としての肉の身を持っている場合があります。ギリシャ神話の神々や 日本の 神道の神々が それに当たります。

色・受想行識と色・受想行識が深いフラクタル共鳴状態にあれば それを神と見なすことに 何ら不合理性はありません。それは最も困難な 肉の身を持ったまま 神に成られた神であるからです。

色・受想行識単独ではなく 色・受想行識と色・受想行識が 深いフラクタル共鳴状態に有ることこそ 人間の理想であり 生命活動のあるべき姿なのです。

ですから 宗教の中では 肉の身を持ったまま神に成られた神こそ 最も深いフラクタル共鳴状態にある神として 崇められるのです。そのような神が 天上界に移行した後も 衆生救済のために 地上界に働きかける神こそ 人々の信仰を集めているのは必然なのです。観音様も そのような人間の理想の姿を完成させて その後に天上界に移行した神の姿として 描かれています。

【色が単数形というモデル】

ところで般若心経において 色が単数形で 或いは固有名詞として表現されているという事実は実に見事と言わざるを得ません。

そしてその結果として この事実を形として 即ちモデルとして表現することがきわめて困難となり 既に表現上の限界に達していることを示しています。そ

れは諸行無常の 形有る世界から 空の世界を想像して表現する限界と言うことが出来ます。

紙面の関係で観音様の働きについては多くを語る事が出来ませんでしたがこの点は他書に譲りたいと思います。

ここで示した「モデル」とは 決して固定的に捉えるのではなく 人類が手に入れた科学的論法と手法で 多くの体験と研究で 改良されていく性質を持つものです。著者としては 宇宙と人間の詳細を説明するには更なるモデルの改良が必要であると考えています。

【論理性はどこに所属するか】

ここで般若心経を構成している論理性について補足しなければ成りません。

ここで私が誰に断ることなく 頻繁に遣っている 「論理」とか「論理性」とはそもそも一体何なののでしょうか。論理はどこに所属するのでしょうか。

般若心経では この論理性を前提に 緻密な論理によって 議論が組み立てられています。もし この論理が非実在で 「無」に帰する存在であるならばここで示している議論そのものが無効になります。

そこでですが ずばり 論理は空相に所属します。空相に所属するから 空を形式化し 法則的に表現した存在として 論理性が意味を持つのです。これは「是諸法空相」に矛盾しません。

つまり【基本三特質】の一つの表現として 絶対性と普遍性を確保するために 論理性を前提に議論を進めることには宇宙的な意味があることになります。

【真・善・美という情緒性は基本三特質に属する】

《宇宙の理念》をあまねく表現することは「真」・「善」・「美」をこの世界に展開することです。そして進歩と調和のバランスの中に 情緒性も生まれてくることになります。

情緒性も論理性も【基本三特質】に基づいていますから 幹となる論理性による骨格が有ってこそ 情緒性は安定したフラクタル共鳴に至ります。

言い換えれば 【基本三特質】に基づかない つまり普遍性に基づかない思考や行為は 「愛」や「平和」に似ていても それは「愛」でも「平和」でもなく 独善の中での独りよがりの屁理屈や 執着に過ぎないことになります。

【苦の原因とフラクタル共鳴】

フラクタル共鳴のない世界 もちろんそれは錯覚ですが 初期仏教の世界は孤立した錯覚の世界ですから 般若心経の当然の帰結として 人生の中の様々な出来事の原因と結果を関係づけた十二縁起と 人生の中で遭遇する様々な苦を分類解析した四諦を 正面から否定しました。これは何も 初期仏教の世界観だけを言うのではなく 現代の唯物論の世界観そのものでもあります。

それ故に 読者としては ならば般若心経が説く「出来事の原因結果」と「人生に於ける苦の原因」について それが一体何であるのか 如何なる意味を持つのか これらについて知りたいと思うのは当然でしょう。

その事に関して 般若心経に直接的には記述されていないのですが それを読み解くことは十分可能です。

初期仏教の世界が単独で孤立している状態ではフラクタル共鳴が自覚できない錯覚の状態ですが 初期仏教の世界が 空を取り入れ フラクタル共鳴状況に移行することが出来れば 即ち日々の生活が 般若波羅密多の瞑想と行の中にあれば この諸行無常の世界は直ちにフラクタル共鳴の状況に移行します。

ですから錯覚があっても 錯覚に気づきさえすれば フラクタル共鳴状態に戻ります。錯覚が無ければ 日常の様々な出来事は全てフラクタル構造の中での出来事と自覚できますから そこに生まれてくる「苦」は必要な苦であり それはフラクタル共鳴の中での「苦」であると理解し 宇宙の中に全肯定できることになります。

したがって般若波羅密多の瞑想と行の中に生きていくことが出来れば そこでは観音様の導きによって 深いフラクタル共鳴の中に住まわせていただくこととなります。その時 そこに現れる全ての出来事は たとえそれが「苦」であったとしても 全ては観音様に全肯定していただいた出来事であり 必要があって与えられている「苦」であり 全肯定されている「苦」であるということになります。

つまり全肯定されていると言う事は それを感謝で受け取るべき事であるという意味になります。

五蘊皆空ですから 苦を体験すれば 結果として人間としての重みは増しますから 無駄は無いと言えます。それが錯覚による「苦」であったとしても 全体としては最も安定したフラクタル共鳴の状態を継続しながら 錯覚の状態から 錯覚が覚めた時に自覚できる絶対調和の世界へと向かう過程の出来事であり そのための力を生み出すために フィードバックが作動している状態であると理解することが出来ます。

【フィードバックを理解する】

フィードバックという 語句のもつ概念は重要ですので 多少詳しく説明しましょう。フィードバックには正と負があります。生じた変化をさらに強めるのが正のフィードバック 生じた変化を抑えるのが負のフィードバックです。

ここで取り上げるのは負のフィードバックであり これを一般に 負を付けずに 単にフィードバックと言います。つまり 生じた誤差を捉えて それを最小にすることでシステムを安定化させるという主旨でのフィードバックです。

フィードバックとは如何なるシステムに対してであっても それを安定的に作動させるための仕組みを意味します。ここで システムとは「系」と訳されますが 一つの目的を持った機構を言います。広い意味では 人間も間違いなくシステムの一つと言えるのです。

そこで 人間という高度なシステムに関してであっても フィードバックは人生を安心の中で過ごし 円滑に人生の目的を達成するために存在します。

修行の上で そして人生を生き抜くうえで これはとても便利な概念ですので その性質と共に是非理解を深めておいてください。

このように フィードバックが一般のシステムだけではなく 人間というシステムに関しても 同じように議論できると言うことも重要です。

さて 技術用語としての一般化されたフィードバックの意味は実に明確です。システムとはある目的に向かって推進しますが ここではフィードバックという修正機構を作動させることで システムを安定化させます。ですから システムには推進力と修正制御という対になる二つの方向の作用が必要であると言えるのです。

そこで フィードバックを正常に作用させるためには 先ずもって「真値」を知る必要があります。

つまりフィードバックとは 現状を「真値」と比較することで システムの間違いを正しく検出し その誤差検出によって システムの動作を修正する仕組みであると言えます。

もしこの前提が崩れて 基準となる「真値」が正しく検出できずに 不正確な検出誤差が発生してしまうと 間違ったフィードバックに成って システムはさらに間違った動作をしてしまい 却ってシステムを不安定にしてしまいます。つまり 誤差を増加させる正のフィードバックに成ってしまうということです。

この事を知って 次に述べることはとても重要なことになります。

【自分に都合の良い「ニセ真値」を探し出してはいけない】

真剣に「真値」を探し求めて生きている人も居ます。しかし ただただ 自分に都合の良い「真値」を創り上げようとしている人も居ます。これでは初めからフィードバックが成功しないのは明らかです。

さらに たとえ正しく誤差検出しようとする努力しても 現実には検出誤差をゼロにすることは出来ません。そのことから原理的に 肉の身が係わるフィードバックというモノは誤差ゼロにはならないのです。

ですから 現実問題としては 検出誤差が必ず入り込むモノと理解しなければなりません。

そこでですが このような認識に立つと 大きな検出誤差を持ったまま 強いフィードバックを行うと その検出誤差が拡大されて システムは却って歪みだしてしまうのです。

結論を言えば フィードバックには誤差をゼロには出来ないが 最小にする事は出来て そのための適切な量というものが有ります。この適量に足りなくても それを越えても システムは不安定になり 歪んでしまうという この避けられない現実を是非覚えていて下さい。

この事の具体的意味を述べましょう。最初の例として 反省というフィードバックの作用を考えてみます。もし反省をしないのであれば もともと人生をまともに歩むことが出来なくなります。これは常識で理解出来ます。

しかしだからといって「真値」を正しく捉えられないまま 間違った誤差検出を続けると その反省はフィードバックには成らずに 却ってシステムをゆがめてしまいます。つまり 正のフィードバックとなって 人生を狂わせてしまいます。或いは 間違った誤差検出で 人に強い反省を求めてしまうと 却

ってその人間というシステムを狂わせてしまうことになります。心すべき事です。

【誤差をゼロにはできないことの現実的意味】

地上界を生きる人間の最高の境地は涅槃であると説かれています。

涅槃に至れば 一切間違いを犯さなくなる人間になるのでしょうか。否 それは違うのです。真値に対するシステム誤差をゼロにはできないことを思い出してください。

ですから 涅槃とは小さな誤差で 人間というシステムをすぐに修正できるようになることを言います。簡単に間違いを認め すぐに修正できる人間になることを言います。

もし 間違いを犯さない人間に成ることだと誤解してしまうと 強引な人間になり 決して自らの過ちを認めない 自己正当化に終始する 傲慢極まりない人間になってしまいます。つまりそれは 涅槃とは正反対の境地です。

このように 修行とは落とし穴だらけであることを 何度も何度も肝に銘じて 慎重に歩まなければならないのです。

著者は この危険な落とし穴の存在を厳密に説くために どうしてもフィードバック理論で説明したかった訳です。

ところで 「真値」への理解度は人それぞれです。日々の修行の中で 「真値」を求め続けて かなりその方向をつかめている人もいます。しかし 日々の修行を怠り 「真値」への理解度が低く 大きく「真値」から かけ離れている人たちもいます。ですから 人様々で その人の「真値」の理解度に応じた 適切なフィードバックを求めなければならないということになります。

【「真値」とは世界観の中での 事象の正しい位置づけ】

話を戻して・・・ ですから 「真値」をまったく無視した 単なる否定や否定のための否定はフィードバックではありません。これはとても重要な認識です。

ここで 人生に於ける「真値」とは 今生じている事象の正しい位置づけという意味になります。

実際問題としては 人間は誰も 完全に正しい「真値」を容易に知ることは出来ないが それに可能な限り近づく努力は出来ますから。そして 誰も最初から「真値」は知らないわけですから 適切なフィードバックを何度も体験していく中で 体験的に「真値」に近づいていくことになります。それが人生の修行と言えるでしょう。素直さが有ればそれは出来るのです。

つまり 人生において「正しい苦」を捉えるには 常に「真値」を知ろうとする姿勢が必要であるといえるのです。

現実には その「真値」を捉えるまでになるのが とても困難であり そのための徹底した修行が必要になります。しかしながら ごく一部の人間を除いて

て 多くの人たちは 自分に都合のよいモノを「真値」として大切に育てているモノです。これでは人間というシステムは最初から正しいフィードバックが成立しないのです。つまり 多くの人たちは 迷いの世界に居ることになるのです。

【意識の多層構造により その意識階層に適した「真値」が複数存在する】

実際には受想行識も受想行識も 複数の意識構造になっていて。さらに 受想行識と受想行識が重なって 複雑な意識の多層構造のシステムになっていますから 最も高度な受想行識での「真値」の下に より具体的な複数の「真値」というものが多層的に存在しています。

ここに示した普遍的な世界観を体得することは「真値」を知るための基本の知識となります。

一つ例を挙げましょう。「真値」として最も本質的には 五蘊は皆空ですから 出来事に対して全肯定されている観音様の意識システムが存在しています。

しかし観音様ではない この現実を生きる人間には それをそのまま全肯定は出来なかったとしても それは過程として許されています。そのギャップを感じ取って その事に「正しい苦の自覚」が有れば 許されます。このように 位置づけが出来さえすれば 五蘊皆空の中で肯定され 許されるのです。

それは日々の修行の中で 自らの思考と行為を宇宙の中で正しく位置付けし 全ての意識階層において 可能な限り全肯定出来るように つまり感謝で受け取れるように 努力して生きていくことが人生そのものです。

そこでもし その全肯定すべき事象を 被害者意識で受け止めてしまうと それは貴重な体験を全否定したことになり これは真逆の位置づけをした受け取り方となり 宇宙システムによる強い調整作用となって 運命を強烈に調整しようとして 強い力が作用します。そしてこのことは 現実を生きる人間にとって 大きな「苦」の体験となっていきます。

さてここに「宇宙システム」という語句が登場しました。フィードバックとは人間側から見た時間軸上での解釈なのですが 時間軸を超越した空中の世界に立つ視点を強調する場合には 宇宙システムと表現します。そこでですが フラクタル共鳴状態の中で空中から見れば つまり 肉の身を持つ人間の視点ではなく 全肯定された観音様の視点で見れば 最も本質的な解釈となりますから 宇宙システムの作用には 検出誤差がありません。ですから 時間軸を前提としたフィードバックの定義には該当しないので ここでは 宇宙の調整作用とのみ記述しておきます。

【善悪の世界での 反共鳴というとらえ方】

ところで 五蘊皆空ですから 観音様の視点からは 未熟な世界も含まれていて それでも肯定されているのですが 人間的な視点から見れば それは明らかに「苦」が増加することを意味し 容易に肯定は出来ません。これを人間は「悪」と呼ぶことさえあります。

ここで 敢えて善と悪の世界の言葉で言い換えれば このような「苦」を増

加させるような状況は フラクタル反共鳴と呼びます。これは人間の視点からは「悪」として 否定せざるを得ないという現実があります。そしてそれで良いのです。つまり 「悪」と見えるモノがそこに有ることを必然と受け取り それに誠実に対処することが 五蘊皆空の意味となります。

深化の遅れた側と 深化の進んだ側が共存することは中々難しいのです。そこに立場の確立がないために 軋轢が発生すると たちまち善と悪の対立が発生します。

当然ですが 深化の遅れた側に立場の確立がないと それが悪となります。

しかし その善の側も さらに深化の進んだ側から見れば 立場の確立がないと 悪に成ることもあるので 深化の差を意識して 深化の進んだ側に対しては 立場の確立をしてから 慎重に丁寧に接しなければならないのです。有り体に言えば 深化の進んだ人や組織に接するときには 慎重に接しないと 自らが悪に成ってしまうということです。そして そこに文化の多層化が必然である理由があるのです。

このような立場の異なる軋轢は本質的な問題で 深刻な課題となり得ますが これ以外にも 同種の深化の層での摩擦は 人々の知恵と思いやりや譲り合いで 最小化できるものです。

【一方 「苦」は深化の遅れを示すモノではない】

さてここで 「苦」の量でもって 「真値」からの離脱量を判断することは出来ません。意識は多層構造であるために 前世から引き継ぐ自分一人の苦だけでなく 家族の苦 集団としての苦 縁者としての苦 民族としての苦 人類としての苦を 一部一人の人が自分の天命として受け持つ場合もあるからです。大なり小なり 自分以外の苦をも一部持って それを体験として昇華する役目を持って生まれてきます。

つまり 色という肉体は 受想行識に蓄積した様々な矛盾を昇華する働きを持っています。それを著者はベクトル昇華と呼んでいます。

もちろんそこには 観音様の導きが秘められているのです。そこが重要です。第一にこれは五蘊皆空なのであり それはつまり観音様の導きなのであり 決して因縁だけで解釈してはならないとする 重要な視点なのです。

そのような自分以外の苦は それを体験として人間の現実を理解し 体験としてベクトル昇華しながら修行を重ね やがて覚醒し 人々の指導的立場に立つ場合もあります。

ですから 普通の人には耐えられないような 大きな「苦」を抱えている人に対しては 「お役目ご苦労様」という気持ちで 丁寧に接することが必要です。

このように 意識構造が多層構造のシステムであるために 「苦」の種類としても様々です。さらに視点を変えれば 色・受想行識に由来する苦と 色・受想行識に由来する苦と 大きく二種類が有り さらにこの二つの中間として複数の種類の「苦」があるということになります。

そこで日頃から 運命の一切を般若波羅密多の中で頂き直し 色・受想行識の立場に立つことを強く求めていくと 「正しい苦」の自覚を持つことが可能と

なります。この **色・受想行識** に由来する「正しい苦」を自覚することが 正しいフィードバックとなります。

一方 **色・受想行識** に由来する苦しみは これは錯覚であり これは間違っただ苦であり 必要ないモノであり 被害者意識がその最たるモノです。

この「錯覚の苦」を「正しい苦」に変換していくことが 修行であり それによって全肯定の道へと移行することが 人生の中での大部分の修行となるのです。

「錯覚の苦」そのものを「苦」であると理解できれば その自覚の瞬間からそれは「正しい苦」となります。この「正しい苦」を自覚できて 般若波羅密多の瞑想と行を深めることが出来るにつれて フィードバックが適切に作動するまでになり 苦を持ったままで 観音様の導きで空へと帰還できるまでになります。

一方 必要の無い苦には幾つかの種類がありますが 中でも一番必要のない「苦」は 想念の苦です。この「想念の苦」を錯覚と自覚できて その錯覚を「苦」と理解出来れば 直ちに「正しい苦」に変換されたことになり この瞬間からフィードバックが適切に作動し 最小限度の苦でもって **空**への帰還の道を歩むことが出来ます。

「正しい苦」を検出できれば フィードバックが適正に掛かり 最小限度の「苦」でもって 般若波羅密多の中に飛び込むことが出来るようになります。ここで「想念の苦は錯覚なのだ」と気づけば 「それが想念である」という位置づけだけで 自分から切り離すことが出来るようになります。想念は自分では無いのです。これは前述の「想念の切り離し」の「行」のことです。

その事が分かれば 苦は激減し 一気に大きく成長します。

フィードバックが作用している状態は そこに原因結果 即ち因縁因果があるように見えたり フィードバックにより蓄積していた原因が消えて行くように見えたりするのです。そしてこの状態の最も本質的な意味は **空**へ帰還するためのプロセスなのだ ということです。

こうして いよいよ悟りへと導かれるのです。その具体的手法に関しては他の著書に詳しく書くことにします。

振り返って 空から離れて 孤立してしまった世界の 初期仏教の十二縁起や四諦では それが単独ではフラクタル共鳴の中にはなく 錯覚であり「真値」ではないが故に 人生に於ける正しいフィードバックとは成らないということになります。般若心経はそれを強調しています。つまり歪んで伝わった初期仏教だけでは決して悟れないと言っているのです。だからこそ仏教再生が必要になるのです。

【修行の両翼としての 般若波羅密多と 苦の正しい理解】

さて ここまででフィードバックという概念を詳しく説明し それが人生において 重要な修行であることを示しました。そして既に 般若波羅密多の概念 つまりフラクタル共鳴の概念についても 般若心経全体を通して説いてきました。この二つの概念は人生の目的に円滑に達するために そしてそのための修行において 「修行の両翼」として位置づけられます。

そこで 纏めれば次のようになります。

人生を適切に前進させ 苦しみ少なく円滑に生きるために 一つの翼は推進力としてのフラクタル共鳴であり つまり般若波羅密多の瞑想であります。そしてその対となる「修行の両翼」のもう一方が システムを修正して 目的に向かわせるためのフィードバックであり それは「苦を正しく感じ取ること」であるということになります。この二つは どちらか一方だけでは円滑な人生は歩めないことをも示しています。般若波羅密多と 正しい苦の自覚 この二つが人生の全てと行っても良いでしょう。

【フラクタル共鳴の深化のを示す（フラクタル深度）】

自らが 般若波羅密多の瞑想と修行を極めることによって フラクタル共鳴の深化の度合いを評価することは可能です。私としては 様々な文化や国家や政治体制 宗教 組織 そして個人に対して この「フラクタル共鳴の深化」の度合いを示す「フラクタル深度」がどれだけ進んでいるのかについて今後も監視していきたいと思っています。

この「フラクタル深度」が未来の人類にとって 進歩と調和の度合いを示す有効な指標となるでしょう。

修行によって フラクタル深度を直感的に感じ取る事も可能ですが しかしこれは 客観的に幾つかの事実を選択し 解析し 分析することで 数値的に評価できる性質のものであると思っています。

ところで 「深化」ですが これをもう少し分かりやすく言えば それは「神聖さ」です。

独善には決してならない 普遍的な人類愛に裏付けられていて しかも人格を越えた 超越的な宇宙的神聖さの方向こそ フラクタル共鳴の深化の方向なのです。

【第二節】五蘊皆空は徹底した現実肯定である

【現実を否定するために 理想を説くのは大きな間違い】

般若心経が解説されたことで 人類史上最も普遍的な世界観が世に出ました。

これが無ければ 人類の恒久平和は実現できません。この世界観が有ってこそ
の政治であり そして この世界観の下での 外交であり 現実対応策なのです。

さて そこでなのですが ここに著者が説いた般若心経を正しく理解していないと
あなたは大きな間違いを生じる可能性があります。著者としては そこを
誤解のないように 明確に説いておかなければ成らないのです。

さてそこでですが この書を読む人達は 多くの場合 知性的で 純粹で 高
い理想を求める人達です。ですから そのようなあなたがこの世界観を知れば
あなたの現実への関わり方は一変するはずです。

これまで通り ただ理想だけを掲げていては 現実を否定する生き方となって
しまい そこから脱出できません。般若心経の真理は五蘊皆空であることを一時
も忘れてはいけません。現実を如何にして肯定するかを心の中心に置いて
生きなければならないのです。

しかも 理想を説くことは本来は正しい世界観に基づかなければ つまり 五
蘊皆空に従わなければ できない筈なのです。

しかし もしこの世界観を全く知らなかったり 或いは般若心経を正しく理解
していなかったりすると これまでの現実への関わり方を自己正当化するだけの
思考に陥ります。そこに落とし穴があるのです。さらには 現実否定が目的で理
想を掲げたり 或いは結果的に現実否定となってしまいます。

そこでは 誰も否定できないようなことを「我が理想」として並べて それに
よって「正義は我が方にあり」と主張してしまうようなことになりかねないの
です。

理想を掲げて 現実を否定するのは 昔からよく有る自己正当化の手法な
のです。そして同時に これに同意しない相手側をも否定することの意味も持
ってきます。「同意しない場合 それによって生じる結果の責任はすべて相手
にある」との主張とよく似ています。

よく聴く 戦争反対 核兵器反対などとは これはもう 誰にも否定できない
テーマであり 戦争反対の主張に同意しないことが真理に反する事のようにさ
え思わされてしまいます。このような当たり前過ぎるほど当たり前のことを主
張することによって 主張する側に正義があると思わせ それを主張しない側
を否定することで 強烈な現実否定のエネルギーを生み出しているのです。

これは五蘊皆空に反する勢力の常套手段ですから気をつけてください。

その勢力にとって この現実否定にさえ成功すれば その勢力にとっては 半
ば成功したといえるのです。

そこに対立の構図を作ることに成功したのです。つまり 国民と国家を分断し
そこに階級闘争の構図ができあがったのです。あとはお決まりのコースで 国民
がいかにか国家や政府の被害者なのかの論理を組み立てていくことになり
ます。

本当に真理を求める人は そのようなまやかさに 絶対に心を動かされては
いけないのです。

その対立構図からは 何も建設的なものは生まれてきません。このような 誰

も否定できない当たり前すぎる看板を掲げて その裏側にフラクタル反共鳴となる危険な主張を隠して 迂回せずに 今すぐ理想を直線的に実現できないことを理由に 現実を徹底否定していることを見抜かなければならないのです。

ここには 私が最も嫌いな被害者意識にまで 敢えて導くという卑怯な手法がとられているのです。つまり 五蘊皆空に最も反する 被害者意識が有効に悪用されているのです。

それらの反共鳴の勢力によって あなたが 国家の被害者と思わせるようなバカな間違いを絶対に犯すことがないように こうして 例を挙げて 私は説いているのです。

五蘊皆空に反する勢力は 現実否定による国家と国民の分断こそ 隠れた真の目的であることを早く認識すべきです。あなたを国家の被害者として納得させてさえしまえば あなたは既にその勢力の手に落ちたことになるのです。

ですから その誰もが否定できないような主張の裏に隠れた主張が どのような理念に基づいた主張なのか それを見抜こうとしなければなりません。

さてここで 悪魔とは フラクタル反共鳴を擬人化した表現です。そして その悪魔は神のような言葉で誘惑して あなたに近づくことを忘れてはいけません。悪魔は理想を掲げて 神のように近づくのです。悪魔の語る 一番最初の段階で 被害者意識をあなたに植え付け 対立構図をあなたが納得して受け入れてしまうと たちまち悪魔の論理に引き込まれてしまい 蟻地獄のように 底から出られなくなります。

ですから その意味でも 被害者意識は最も危険な論理なのです。

戦争反対に限らず 直線的に目的を達するのは多くの場合不可能です。その目的に近づくためには ゴールを見定めたまま一旦後戻りして 大きな山を迂回しなければならぬこともあります。一旦立ち止まって 船を建造して 海路を行かなければならぬこともあります。頂上へ到達するためには ここまでやっと登りつめた頂きを一旦降りて 長い下り道を歩まなければならぬこともあります。東へ行くために いったん西へ歩み始めなければならぬこともあります。

般若波羅密多とは五蘊皆空を地上に降ろして 現実肯定の上に立って 個と全体を対立ではなく 調和の中に導き 人類の恒久平和を地上に導こうとしているのです。

多くの人達は理想にあこがれます。特に 知性的で善意に生きる人はその傾向が強いと思います。しかし 理想をそのまま直線的に実現しようとするのは大きな力とはなり得ず 障害だらけで 現実否定だけに終始して 却ってフラクタル反共鳴になってしまうことが 殆どなのです。

そう成らないためには 先ず自分の足元を確実なモノにしなければ成りません。それは自分を知ると言うことです。人類愛の心を育て 真の世界観を身につけると言うことです。その世界観に立って 自分の立場を確立すると言うことです。

般若心経で説かれた世界観によれば 世界は五蘊皆空なのですから 現実には常にフラクタル深化を続けています。その深化の過程を捉えて 現実肯定し さらにそこから深化させていかなければなりません。

今を肯定できなければ いつまでも肯定できません。今を幸せと感じなければ いつまでも幸せは感じません。

幸せが未来にあると思わずに 今を肯定できれば 深化の途中であっても 幸せ

を感じる事ができるのです。でも 肉の身をもつ人間である限り 悲慘のどん底にいて そこで現実肯定は難しいでしょう。それはそうなのです。しかし その場合でも 悲慘を嘆くのではなく 一步でも現実肯定できる方向に 自らをそして相手があるのであれば 相手も含めて 進化させる努力が必要なのです。

ですから 今の時代に 潜在的に求められているのは 誰かが考えた理想ではなく 新しい理想を生み出すための世界観なのです。

般若心経の世界観はそれに応えるモノです。いったい これほど普遍的な しかも個人崇拜にならない世界観を示した思想体系は過去にあったでしょうか。無かったです。

善意の理想主義者や 理想を掲げて唱える人は 真の世界観が無いまま 現実の矛盾を突きつつ 本人の理想を語りますから 多くの場合は現実否定となります。自分で良いことを主張していると思っているだけに 危険が伴うのです。

それが「とても弱い主張」であるならば 先に述べたフィードバックの原理から そこに守護の神霊の修正指導も入って 一つ外枠でのシステムでの弱いフィードバックの作用に変換して フラクタルの深化を深めるように修正することもあります。しかし その「主張」が強くなってくると その原理からフィードバックには成らず 大変危険な破壊作用を伴ってくるのです。

「人の理想」に係わることは 理念を形成するために重大なことだけに 《宇宙の理念》にも直接関わってきますから 真の世界観の無い このような直線的な理想論の主張は 現実否定ばかりが強くて 般若波羅密多にはまったく共鳴しないのです。そしてしばしば フラクタル反共鳴となるのです。

ところで このような理想主義者には二通りの人が居ることをここに示しておく必要がありますね。あなたが当てはまるかどうか あなた自身に聞いてみることをお勧めします。

それは 第一のグループは現実否定の勢力の下で それが現実否定であることを自覚して 現行の秩序破壊を目的として フラクタル反共鳴に向かっている人達です。

そのような人達がいる一方で 第二のグループが存在していて 現実否定を多少は自覚しつつも そうすることが良いことのもりで 第一のグループの人たちと連携をとっている人達です。この人達は第一のグループの予備軍でもあるのですが 善意のこの人達には それに気づくことによって フラクタル共鳴に至るための特別の道が用意されています。

そのためには この理想主義の背後に 隠れているモノを 見抜かなければ成りません。いいですか このような非現実的な理想を正面に掲げる人達の背後には 何度も言うように 現実を否定する勢力が隠れている場合が多々有るのです。或いは 故意に隠されているのです。そしてしばしば 決して放置は出来ない 危険な巨大勢力が隠れている場合があるのです。

その隠された意図により 第二グループの人達による折角の現実を良くしようとするための主張は 本人の意に反して フラクタル反共鳴となってしまうのです。自らの理念がどこにあるのかを常に良く吟味している必要があります。

もちろん 第一のグループのように あなたがその隠れた勢力を知った上で

それを認めて その上でその勢力の主張に同意し それをあなたが掲げて主張するのならば。そして あなた自身がその勢力と共に 現実を否定し続けているとの自覚があるのであれば それなら それは本当にあなたの意志なのですから あなたが戦争反対 核兵器反対と主張しても あなた自身に矛盾はないことになります。

【内観し 自らの立ち位置を確認しよう】

本当に自分がそうなのかどうか 良く自問自答し 内観してみることをお勧めします。自らの行動の原点にある行動の理念を確認し それが関わって居る周囲の勢力の理念に合致しているのか それともまったく違うのかを内観しましょう。内観の結果 「私に自己矛盾は無い」とし 「これが自分の意志である」との確信をもつ人達は それはそれで 一つの生きる道なのであり。たとえそれがフラクタル反共鳴であっても 五蘊皆空なのでから 長い道のりを通して いずれその事象は反対側の立場で 自分に突きつけられてくる時がきます。つまり 自ら自分の主張が具現化した「理想論による現実否定の世界」を直接我がこととして成される「周囲からの否定」を体験することになります。

革命家は秩序を破壊するところまでは出来ても 新たな政権運営は出来ないとされます。自らの破壊した秩序以上のモノを作れないとするなら 結果として大きな損失だけが残った事になり これは重大です。これでは自ら茨の道を歩むことになるのは必定です。そこで自らの体験を熟成して やっと何かを悟ります。大きく遠回りしますが 最終的にはこの人達も救われます。この宇宙は五蘊皆空として 全肯定されているからです。

この宇宙では 基本的に自分の意思は尊重されるのです。そしてその思いは実現します。

しかしながら 著者としては あなたに第一のグループのようなフラクタル反共鳴の道を 歩んで欲しくないからこそ これを書いているのです。

私が救いたい人達とは まず最初に それと知らずに そのような勢力の人達に騙されている第二グループの人達です。しかも その誰もがその勢力に騙されている自覚は全くなく 自分の本来の意志に反して 結果的にこのような現実否定の勢力の味方をしてしまって その理想もどきだけを主張している人達が 世の中には沢山居るのです。

【ここにこそ、救われがある】

私が救おうとしている、第二グループの人達とは、無自覚の内に、自分の意に反して、自分の足下を自ら崩してしまっている人達です。そのまま自分の意思とは異なる道に引き込まれていくことは、これは大いなる悲劇だからです。

そしてもし、あなたがそうであると気づいたなら、一時も早く、そこから逃れるべきです。ここまでの理想もどきは捨てて、私と共に、本当の世界観に基づいた真の理想を求めるべきです。

このような人たちをなくすために、そして多くの人たちに、真実の道を示すた

めに、般若波羅密多に共鳴する理想を掲げつつ、世界観から導かれる現実対応策を説くことが、いま最も求められていることであり、これを般若心経の世界観から導き出さなければならないのです。

まだまだ、般若心経の世界観を知る人は少数ですが、これからは皆さんが、これを世界に向けて広げて行って欲しいと、著者である私は思っています。

多くの人達がこの普遍の真理に触れることで、フラクタル共鳴が発生し、それが拡大し、やがて人類を包み込み、人類に大きな影響を与え続け、次第に世界の恒久平和に向けての具体的な動きが始まっていくこととなります。

【民主主義は絶対の真理か。歴史的に二つの立場がある】

多くの人達が信じる現代の真理 それはデカルト以来 西欧の封建主義の時代には個が搾取されたという歴史観により その反省に立ち 個の抑圧の体験が生み出した 個の自由を追求する個人主義が生まれました。そしてやがてそれは近代の民主主義を形成していきます。

国家体制としての議会制民主主義は 自由と平等 個人主義 人権 言論の自由等に価値を置く 新たな理念が生まれました。それは民主主義という 近代が生み出した新たな価値体系である といえます。

そしてそれは人類の歴史の中で積み上げた多くの体験を反映し それを十分に煮詰めていて かなり深化した価値体系であると言えます。このような現代における民主主義は大いに評価すべきと思います。

もちろん 社会主義や共産主義を語る危険な独裁体制は論外として 人類がここまで積み上げた自由を求める様々な試みは人類の歴史にとって貴重な体験でありました。

【理念の出自となるべき 世界観を曖昧にした民主主義】。

近代の民主主義は 同じヤハウエを唯一の神とするユダヤ教とキリスト教の確執の中で生まれたと言えますから 当然新旧の聖書の影響を強く受けて育ち 世界に広く普及しました。ここまで普及した理由は 理念の出自となるべき新旧の聖書の世界観を消し去ったこともさることながら その展開手法に幾つかの工夫が成されているからです。普遍的に多くの文化に適應させるために 敢えて新旧の聖書の色は消されています。ですから 民主主義はユダヤ教とキリスト教以外でも 他の宗教国でも何とか機能するし さらに驚くことは 宗教を否定し 拒否している唯物思想の国家でも成り立つという 実に自在な思想となっています。

ですから ここで立ち止まって 今ここまで世界に広がった民主主義を支えている共通の価値とは一体何か について考えてみれば それは一言で 個人主義という価値であると言えます。

現在の段階で このような民主主義を 自由主義国家の多くの人々 特に日本では これを無批判に受け入れ これを宗教の如く 絶対的な価値観として受け入れています。日本の多くの人達にとって 民主主義が真理であり 民主的で無

いものは真理では無いとの信念を持って 行動をしています。「それは民主的である」と言えばそれは真理であるということと同意語です。

しかしながら それを主張するには かなりの無理があることに気づかなければなりません。先ず なんとと言っても その根拠を普遍的な世界観に立って 示さなければ成りません。例えば 一つ「自由と平等」を取り上げてみても それがそうである根拠はどのような世界観に基づくモノなのでしょうか。

民主主義は今 民主主義以外のところから 挑戦を受けています。外からも内からも数々の挑戦を受けていることに気づきましょう。それを無視して 民主主義を完全無欠のモノとして 或いは相手が納得しない「自明の理」を振りかざして 一気に突っ切るのではなく ここは一旦立ち止まって 自らを省みる必要があるのです。この際 民主主義を享受している私達が 自らを良く内観して 民主主義が内に抱える 矛盾を正しく自覚し そこに「正しい苦の自覚」を持つことが求められているのです。

そして 民主主義を支える幾つかの理念に対して 普遍的な世界観に立つことで 正当な根拠を与え そのことで民主主義を一部改良し さらに発展させて行くべき段階に来ていると 私は感じています。

私は ここには現行の民主主義の理念を「自明の理」とか 「普遍の真理」と考えるこの人達の・・・ いやこのような人達が大半のこの時代の 危うさともろさを感じとっています。

過ぎたるは及ばざるが如しで 人造思想が完全であるわけは無いのです。このような世界観無き理念の単純化は その適用範囲を誤ると大変危険なのであり 民主主義を大切にすれば その適応範囲を吟味し しかも民主主義の持つ致命的欠陥をも十分に知り尽くしておく必要があるのです。それについては後ほど述べます。

【個人主義の限界】

しかしながら 一方では民主主義は矛盾を沢山はらんではいるが 個人主義を貫いているし 独裁国家 専制国家よりは 個の自由が保障されている分 ずっとマシだから と言う理由で これが仮のモノではあっても 人類の深化の過程として 受け入れている人達も多く居ます。或る元政治家も 「民主主義はポピュリズムそのものだ」と言い切っていました。

これが正常な感覚というモノでしょう。皆さんもそのように受け入れて欲しいと思っています。

また イスラム教の国家では 個人主義をも受け入れつつ 国内を纏め 世界の国々と対等に付き合うために 世俗主義として 統治は民主主義的に行い 精神性としては 宗教に根本を置く形をとることで 宗教と民主主義とをうまく整合しようとしている試みが成されています。これは確かに賢い選択と言えるでしょう。

しかし そうは言っても そのような人達の中には西洋生まれの民主主義は自分たちと肌が合わないから という理由で イスラム原理主義に回帰しようとする勢力も生まれています。イスラム原理主義はともかく 民主主義と肌が合わないと感じるのは ある意味 彼らは宗教民族であるから これは当然の成り行きと受け取るべきでしょう。

【正しい世界観により 民主主義の理念に不動の根拠を与えよう】

そこでですが 民主主義はキリスト教社会で生まれたと書きましたが そのキリスト教社会の中では民主主義は手段に過ぎません。彼らのホンネはキリスト教にあります。つまり 彼らにとって・・・それが彼らに自覚があるか否かは別なのですが・・・精神的にはキリスト教で生きていて その中での行動様式の手段として民主主義を位置づけているのです。社会を維持する手段として それから他国との交渉は民主主義的な発想であり それをタテマエとして生きているのが実態です。彼らは案外 自ら生み出したこのホンネとタテマエをうまく使い分けているということが言えるでしょう。ですから 私達も民主主義をホンネとしてはいけないのです。それはタテマエとして 行動の手段として付き合うべきであり ホンネは自らの精神性をキッチリと持っていなければ この人造思想に振り回されることになるのです。

振り返って 民主主義は確かに世界中に広がったけれども このように その理念の出自となるべき筈の世界観が一向に定まらない状況が 生まれたときからの民主主義の宿命なのだと言えます。それは世界中に共通の価値として 民主主義を広げるためには仕方が無いことだったのだと思います。そこで これからは その理念をもう一度吟味し その理念の基となる人類普遍の世界観を構築して そこに最も重要な精神性を置き それをホンネとして その基に民主主義を手段として位置づける必要があるのです。

般若心経の世界観こそ それを可能にするモノであると私は考えています。もう少し 民主主義を考えてみましょう。

【民主主義の理念はどこまで通用するのか】。

ところで その民主主義の根幹を成す個人主義は近代国家の中で育ちましたから 私達はその恩恵を大いに受けて 今を生きています。しかしそれも行き過ぎると 飽くなき個の利益の追求となってしまう その結果 全体の利益を失い 自己矛盾に陥ります。「個人の幸せの追求の先に 全体の幸せがある」という 無言の仮定が間違っていることに気づかなければ成りません。ここに個人主義の限界がありますね。

今 「イスラム国」が出てきて 民主主義は正面から挑戦を受けています。民主主義はその形成の過程で 多くの文化や国家体制に対応できるように 敢えてその世界観をぼかしてきたことで これだけ世界に広がりましたが 逆にぼかした故に 根拠を明らかにして 自らの理念を正面から語る事が困難になってきて居ます。

自由 平等 国民主権 言論の自由 個人主義 人権とは 自由を満喫している民主主義の国に生きる人達には それは疑いようのない真実とっていますが 実はどれ一つを取ってみても その根拠が曖昧なのです。もし それを異なる理念をもつ集団から 否定されたとき 明快な反論の回答を持たないのです。

それは どのような世界観から生まれた理念なのか それを明示できないのです。

ですから 民主主義はいよいよ次の深化の段階にさしかかっていると云えますね。

【議会は本来 議論の場であり フィードバックの場でなければならない】

次の例ですが 実は これは特に 日本の議会制民主主義の問題なのですが 政権与党と野党との関係も もう見慣れてしまいましたが 不思議に思うときがあります。しかし見慣れてしまうと 「まあ こんなモノか！」とあきらめて見えてしまうから 却って問題は大きいのですね。

野党の姿勢というのは 先に示した定義からは どう見てもフィードバックではないですね。明らかに反政府ですね。つまり 多くの野党はどう見ても政府と理念が異なる立場ですから 何を言っても攻撃にしか成らないのですね。攻撃ではフィードバックにはならないのです。

否 フィードバックの野党も確かに存在しますから まだまだ 見捨てたモノではないと思います。

正確には 理念とは より根本の理念から 部分の理念まで 多層的に存在し 具体的方針につながっています。方針の違い程度であれば 話し合いが通用しますが 根本の理念を異にする場合は 話し合いは通用しません。

そして現実には 理念を異にする野党と 理念を一致させた野党とが混在しているというところでしょう。

しかし中には 理念を共有しなくても それが攻撃であっても フィードバックでなくても それでよいという人もいるでしょう。それに対する回答は 世界観にまで戻らなければ 返答できませんが それはしばらく 棚上げして議論を進めたいと思います。

さて 国会というものは はたして議論の場になっているのでしょうか。ただ 政府を攻撃するだけでは 政権を弱体化するだけです。ひいては国力を弱体化するだけです。時の政権は野党と同時に 同じテーマで外国勢力とも戦っていることとなります。このような不毛な議論は無駄なエネルギー消費と見えますね。

理念の異なる野党と元々理念の異なる外国勢力とが利害を一致させてしまうと これは大変危険な構図を創ります。その事に対する危機感を持つべきです。

外交と防衛は 秘密にすべきことが多く もっともっと丁寧な扱いが必要と思います。

私から見れば 議会制民主主義の下の 国会での議論は 議論の前に 議論のテーマとなっている課題だけを質問するのではなく 発言者および発言者の属する政党の理念の中から まず議論のテーマとなっている対象の位置づけを明確に示すべきです。そして その理念の基となっている世界観を明確にすべきだと思います。同じ 反対でも 理念が異なれば ましてや世界観が異なれば 同列に扱うことはできないのです。

相手と世界観を共有しているのか 否か。そして理念を共有しているのか 否かを示すべきです。そしてさらには 理念を共有した上での方針の議論なの

か。理念と理念の対立からくる理念のための議論なのか。理念を異にする上での方針の議論なのか。これらを明らかにしなければ はじめから議論は成立していないのです。

そして この本質的問題を解決しようとするならば 与党は質問を受けるだけではなく 与党から野党に対して質問し 野党側の背景にある世界観と 理念と その方針をより明らかにするように 複数の質問により 聞き出すという 双方向の議論の習慣が必要です。結果として 双方の議論がかみ合わなくても 双方の世界観と理念が明確になるという 国民から見たときに 十分な利益がもたらされると思います。

ですから 野党側も しっかりとした理念を持たなければ 質問は単なる攻撃の意味しか持たないことになります。

このように 議会制民主主義を改良しようと思うと この基本的なことから見直さなくてははいけません。

子供達に見せて恥ずかしくない議論をしなければ成りません。子供達が このような攻撃しかしない 揚げ足取りのような 大人のまねの議論をしてもそれで良いのでしょうか。

これは民主主義の本質的矛盾を示しているものであり アメリカ大統領選のテレビ公開討論のように 質の低い議論ばかりを見せつけられ ていたらくした姿にため息がでてしまいます。この姿はまさにポピュリズムです。

しっかりとした普遍的な世界観があり そこから導かれる理念の下に 理念を共有した上で フィードバックのための議論がなされるようになってほしいと思います。

長い議会運営の歴史の中で 政権を持つ側が 暴走しないように という配慮から こんな姿になったのでしょうか 真の世界観に立って 根本から見直してみたいものです。

このような議論では 真っ向から国益に反してしまうと見えるときがしばしばあります。いったい 政党とは何か と考えさせられます。

【現行の民主主義からはじめる】

現行の議会制民主主義においては 理念が異なるにも係わらず 否 理念無き政党も存在するにも係わらず 対等に扱わなければ成りません。

多くの場合 理念には優劣があります。それぞれの理念には「フラクタル深度」の違いがあります。しかし 議会制民主主義の中では それらをも全て対等に扱い その優劣を決めるのは 主権を持つ国民であるとするのが 民主主義の原則です。これが民主主義の特徴であって 国民の選択こそ 最終結論であるのです。これが真値であるはずは決してないのですが 般若心経の世界観が一般化されるまでは 「真値」を客観的に評価できないので 直ぐには この原則を変えることは 避けなければ成りません。

言い換えれば 議会制民主主義では 深化の度合いが異なる理念を 常に対等に扱い その優劣を決めるのは 空でも色でもなく 色を抱える主権者としての国民であるという原理的矛盾を抱えています。

ですから ここでは色も納得できるように 般若心経から導かれる理念を説

明し 納得を得なければ成りません。

果たして 緊急時にこれに対応できるとの保証はないのですが 現行の民主主義の中では それしか方法はないと言えます。

ここに 今時の議会制民主主義の 限界を見ているような気がします。

般若心経の世界観からは 理念の優劣は明確ですが それを他に強制できないのが ここでのルールです。

どんなに良いことであっても それを強制しないというのが 宇宙創造の理念です。般若心経の世界観に自らの意思で 帰依する以外にないのです。

よく見ると この世界は確かにそうなっていますよね。それはつまり しばしば「人間はなぜ最初から 救われた状態で生まれてこないのだ」という大きな疑問の回答にもなっています。

般若心経の世界観とそこから導かれる理念こそ至高のものなのですが それを強制できないということから その理念に反する理念や行動原理については 禁止するのではなく それを一見解として 公表することは出来ます。

そこで 般若心経の世界観から導かれる理念に沿って現状を評価してみましよう。

日本という国は 特に深化の進んだ大調和の国ですから この国の平和は人類の平和に直結しています。日本の安定は世界の安定に繋がります。ですから 日本を貶める力はフラクタル反共鳴なのです。決して我田引水のことを言っているではありません。般若波羅密多に強く共鳴する この日本の 宇宙における重要な位置づけを自覚して 自ら知恵を出して 真の議会運営が出来るように 議会制民主主義を根底から改良するべきと思います。

さて日本に於ける 議会制民主主義の未来の姿の一例を ここに示しました。般若心経の世界観を知れば これは著者でなくても 示すことが出来る筈です。般若心経の世界観を理解した人の解釈が 私の解釈と どこかが違っていたとしても それは本質的な差異ではありません。

般若心経の世界観から発して そこから理念を導き それを現実の政策に降ろすには この書で示したフィードバックの原理は十分に役に立つと思います。

【政党は世界観・理念・そこから導かれる政策で勝負せよ】

それから すべての政党は まず自らの世界観を示し そしてその次に その世界観から導き出される理念を示し さらに その理念から導かれる政策を発表し その制作を世界観と理念から説明し この次元でこそ政権を争うべきです。その議論をこそ国会で答弁し 質問し 政策や法律を詰めていくことが 近未来の国会でありたいと思います。世界観・理念・政策で議論できれば 国

会という立法機関は十分機能を発揮できると思います。

是非 多くの人に挑戦して欲しいと思います。

現状を見れば そうはゆっくりしていただけないと思います。現状を見てみれば 見かけは平穏に見える国内の状況の外側では 危険な勢力との無言の戦いが続いています。

平和とはこのような戦いに勝利しなければ得られないことなのです。「祈っていれば 神様が守って下さる」などと言うのは間違いです。同様に「いざとなればアメリカが守ってくれるから 我々は話し合いだけしていれば良い」というのも間違いです。自らの手を汚さずに 国を守ろうとすることは不誠実であり 《宇宙の理念》に合致しません。それは有り得ないことなのです。

消防自動車があるから 火事になるのだと言うのは間違いです。話し合えば火事にならないというのも間違いです。

そのような本末転倒の平和論が幅をきかせている中で 理念の異なる外国勢力と意思を共鳴させて 与党の批判をしてはならないのです。野党側が「そのつもりはない」と言っても 結果として 利用されていることが多々あるのです。

結果として その勢力に手を貸してしまっているのです。外交は超党派であるべきで 国内で足を引っ張ることは絶対に避けなければならないのです。理念の異なる外国勢力はいくつも存在しています。その勢力は虎視眈々と国内の隙を狙っています。このような反戦平和を唱える国内勢力は その外国勢力にとっては 活動にきわめて有利な環境なのです。

これは人類の恒久平和を語る上で避けては通れない認識であります。そしてこの構図を無いものとして無視するのが 隠れた外国勢力なのです。

【真の世界観から行動方針を立てる】

これを般若心経の世界観から説明すれば 五蘊皆空の立場から そこに今その「悪」と見ることが存在していることを積極的に捉えて その「悪」を消滅させる努力をしなければならないこととなります。これを放置することは誠実ではないのです。

あなたが深化の進んだ修行者ならば このような危機的場面でのあなたの判断が求められています。

ここは 敢えて善悪の対立する世界として捉えて 深化の進んだ絶対善の立場で対処すべき事象なのです。

即ち この場面は フラクタル共鳴の深化が進んだ事象と その深化が遅れたフラクタル反共鳴の事象とが直接接するために生じる軋轢であって ここでの善悪の構図は既に明らかであり 善は悪に勝利しなければならない場面なのです。この場面は大変危険であり 特に慎重さが求められます。

このことから導かれる重要な結論は 上記のような軋轢はフラクタル層の中の渦として 常に発生しますから フラクタル共鳴の深化の度合いを基準とし

て判断する調停機構が 国内的にも国際的にも 存在する社会を作らなければなりません。もし それがなければ 戦いを余儀なくされます。

これは戦いといっても 暴力を抑制し 排除する力であり これは「武の力」であって フラクタル反共鳴を消滅させる力であり 深化した世界の力であり 暴力とは正反対の力です。そしてそれは 誠実さから導き出される力であって 全肯定された力なのです。

国連は一部そのような機能を持つことを期待されましたが 現実には全くといっていいほど その機能を果たして来なかったといえますね。

もともと 第二次大戦の戦後処理機関に そのような機能を期待するのが間違いです。しかも 拒否権という強い権限をもつ一部の国が フラクタル深化の低い独裁国なので 目的を期待するのははじめから無理なのです。

ですから 普遍的な世界観に基づく 新たな機関を国内的にも国際的にも構築しなければなりません。それを設立することが世界の恒久平和につながります。

そして それは今すぐにでも作ることができるのです。その機構の調停結果に従うか 従わないか それは自由なのですから。

【第三節】 見えてきた人類の恒久平和

【人類の未来には うっすらと恒久平和が見えている】

真実の世界観を知らないから 人類は混乱しているのですよね。真実の世界観を知って それを国家体制に反映させることが出来れば すばらしい未来が到来するであろう事は容易に想像できます。しかし 普遍性を確保しないと 今世を騒がせている「イスラム国」に成ってしまいます。自分たちだけが正しいと言って 他を排斥するというのは 前時代的であり 人類の未来にとって これほどの 普遍性を欠いた危険な行動様式はないのです。

「イスラム国」はイスラム教徒からも否定されていますから まともなイスラム教徒ではないとしても イスラム教を自己正当化の理由としていますから 自分たちに都合の良い 唯一の神の下に 独善的な国家理念を掲げています。「イスラム国」の行動は根本から間違っていることは論を待ちませんが その善し悪しは別として イスラム教を理念として掲げる以上 それに今の自由主義を掲げる国家で 太刀打ちできるのか と言う切実な問題を提起しています。たとえ軍事力では勝っても 思想として それに太刀打ちできるだけのものが 我々民主主義国家に有るのか と問えば それは否でしょう。

ただし 今は 日本を取り巻く環境には 不安定さが漂っていて 先が不透明には違いないのですが 一方では 人類の恒久平和の兆しもかすかに見えてきています。

しかし 今この書の立場は 理念の重要性を説くのが目的なのでありますから 国際情勢の現状分析をして その対応策の詳細を述べることは これ以上控えておきたいと思えます。

【正しい世界観に立って 民主主義を改良する】

このように 理念として 普遍のかけらも無い 暴力的な「イスラム国」に絶対に負けないだけのものが 今この世に存在しない以上 私が急いで それをここに示す以外にない と思われてしまうのです。

その思想とは正しい世界観に基づき 人間と宇宙の関係を明確に示し 普遍性を回復した未来の人類の姿を示すことなのです。

さて 当然のことながら 世界の恒久平和とは 人類規模で考える必要があります。人類の歴史から多くを学べば 地球政府的な中央集権体制は大変危険であるとの知恵が当然働きます。これには既に共通理解がとれていると思えます。

ですから 私達が人類の未来に求めるものは 人類の歴史を尊重して 各文化が普遍性を回復しさえすれば そこには次第に未来像が見えてくるのです。

それは 普遍性を失う危険を伴う中央集権的な地球政府ではなく 都市国家群が かなりの独立性を持った各国家から成り フラクタル共鳴の関係で結ばれているような姿であろうと私は考えています。そしてそれは決して平面的ではなく 均一ではなく 固有の文化が互いに関係し合い しかもそれぞれが多少の距離を

とりつつ 適切なバランスをとって存在します。

ですから グローバリズムは世界の流れであり ブレーキがかかりませんが 結果として文化経済の均一化をもたらしますから 行き過ぎたグローバリズムは避けなければなりません。国家が政治経済文化の独自性を保てる範囲でのグローバリズムを求めるべきでしょう。

国家理念の中には 優先される伝統文化があって当然です。しかもそれが固有のフラクタル共鳴を実現し 他の文化との関係を保ちつつ 多層的に関係します。

つまり 国家理念は その実現度合いにより 般若波羅密多の「深化」の程度によって 自ずと多層化されて行きます。その多層化は般若波羅密多の深化の度合いから見て 矛盾無く多層化と多様化が成されていますが 同時に 他の「国家理念」からみても やはり矛盾が無いように 構築できるような工夫が必要と思います。

そして たとえ理念は異なっても 世界観が共通であれば 大きな矛盾にはなりません。それぞれの立場を尊重した関係を保てるはずで。

国民は自由意志で国家理念に向かうことで自ずと統一されます。

どこかの深化の遅れた国が未だにやっているように わざわざ国外に敵を作って 国内に向かう国民の眼を反らし 敵に向かうことで統一を図るような愚行から いったん早く離れなければなりません。

現実にはこのような前世紀的な理念も存在していて そこには歴然とした深度の違いがありますから その違いにふさわしい 多層構造の世界が構築されていきます。それは 自然の論理の中で 多層構造の中に階層化されていくことになります。

ここで 我々の求めるべき理念とは決して作文ではなく 絶対普遍の世界観に立ち 自らの実践と そして人類の歴史的体験をとおして導き出す以外にないのです。民主主義は人造思想であり 決して理想の行動原理ではないけれども 人類にとって 民主主義の体験は極めて貴重であり すべての人が民主主義を一度は体験して この経験を通して 人類の未来を作る真の行動原理を生み出していかねばなりません。その意味で深度の浅い国においては 民主化は正しいといえます。

【人は理念で生きる存在】

人は理念で生きているのです。「理念など知らない」と言ってみても 人はやはり 理念として 生きるための基本の価値を作っていて 自分の固有のベクトルを発し続けています。

この積み重ねの中らにじみ出るベクトルは 一朝一夕には変わらないモノですが 今後の人生の積み重ねの中で 次第に変わっていきます。

一方 宗教国家では 理念というものが明文化できるほど明確ですが 一般には 理念を意識することは少なく それであっても理念は必ず存在し 不文律として 人々の道徳観や生き方を支えています。そして理念は般若波羅密多の深さによって 多層化されます。

【般若心経の説く世界観から人類普遍の理念を導く】

本来 理念とはその根拠となる世界観があって初めて意味のある存在なのです。世界観がない状態で 理念単独では意味のある存在にはなり得ません。

この単純な論理を現代人は見落としています。

ここで 絶対普遍の世界観を構築した思想体系としての 般若心経の立場から言えば 人間とは本来 空に等しい色と 自己の利害に流されて 大局的判断が出来ない色と この二つの意識構造を持つ存在なのでした。それ故に 現代がいうところの自由も平等も 個の権利も義務も 命の大切さも 人間の尊厳も 現代の価値はすべて 色を色と勘違いして 「色だけの自分」を中心に 「色を絶対」と見立てて 組み立てられた価値体系なのです。

ここで知るべきは 人類の未来を作る価値体系は 色と色を分離して その二つの立場を統合する事が必要になるのです。そのような価値体系は 未だ用意されていないという事実を 現代人は謙虚に受け入れなければならないということです。

ここに きわめて論理的に記述された般若心経の世界観が登場したことで 多層構造の中の多くの宗教をフラクタル共鳴状態に導くことが可能となります。

例えば キリスト教であれば 先に述べたように 普遍性が回復されることで 「神の子」がイエス独りではなく 全ての人が「神の子」の地位を取り戻せば そしてこの真実が新たに説きなおされれば 色と色の関係はそのままキリスト教の世界観をフラクタル共鳴状態に導き入れることが出来ます。そして キリスト教と密接な関係をもつユダヤ教とは 多少の調整で 無理なくフラクタル共鳴状態になります。

イスラム教に関しては 著者の解読した般若心経が宗教ではなく 人類普遍の真理で在ることを公式に認め しかも内部から自ら普遍性を求める強い欲求がでてきさえすれば 解決できると思います。今暫く その時を待たねばならないでしょう。

ヒンズー教や日本の神道は もともとが普遍的でありますから そこに障害は殆ど無いと私は考えています。

それ故に この価値体系は 現代から見て これを受け入れるのに それほど大きな障害はないはずです。

ここで一步引いて 俯瞰してみれば ある意味 これまでの民主主義のように 人間の判断に完全さを要求することよりも 人間の判断に最初から完全な部分と不完全な部分の両方を認めることのほうが より自然で 常識の範囲内であるとさえ 言えると思います。

また 科学的を自称する 多くの唯物論者であれば そもそも絶対という概念がどこから来るのか 唯物論にそんなモノは 初めから存在しないはずですから 般若心経での初期仏教の立場に立って 諸行無常の唯物論を完全否定して欲しいと思っています。

人類の未来を作る真の価値体系は正しい世界観に基づき 正しい「宇宙と人間との関係」に基づいて構築されなければなりません。それはこれまで通り 色 の自由性を追求しつつも 人間の本質である 色 を主体とした 色 の自由性の下に 色 を位置づけた価値体系を構築しなければならないのです。

そして特に 色 の自由性と 色 の自由性は一致しないこともしばしばです。その矛盾を前提に行動原理は構築されなければなりません。

それをここでは「色主義」(又は 色主色従主義)と呼称しておきましょう。

人間とは 空 と一体で 空 の中から常に正しい判断をする 色 と 常に自己保存と 目先の利害に流される 色 と 二つの部分から成り立っているのです。

この真実こそ 次世代の民主主義の体制に反映させなければなりません。そしてこれまでの民主主義は 世界観から導かれる筈の 理念の根拠が希薄なために これまで民主主義は民主主義を否定する巨大な敵に直面したときに 大きな自己矛盾に直面していたのです。

時間空間を超越した 空 そのものと等しい自由性を持ち しかも 空 の普遍性に基づく多様性としての個性を持った 色 と。常に多くの制約の中にあって 色 の指導の下になければ 不完全そのものの 色 とを明確に区別し 本来一つの 空 である「一」なる 色 と 個性として「多」である 色 と その働きとして複数に別れた 色 と。さらにフラクタル共鳴を発生するシステムと 色 に作用する真値に基づくフィードバックのシステムとを 求めるべき価値観の中に導入しなければなりません。

そのことで 現代の価値体系 民主主義は大きな変更を余儀なくされます。しかしながら この変更を肯定的に捉えれば これは革命ではないのですから 犠牲の大きい革命を起こさなくても 現状からの大きな改良で済むという意味でもあります。言い換えれば 人類はここまで多くの体験を積み重ねて 改良で済むところまで 民主主義を深化させたのだ といえるのです。

【立憲君主制をとる日本の場合】

日本のように 基となる体制が立憲君主制であれば 改良によって フラクタル共鳴の体制を構築しやすいのです。その一例を書いてみましょう。

般若心経の普遍的な世界観を国の形に投影します。そのために 先ず参議院を 色院 とし 衆議院を 色院 とします。前述の通り 色院 は国民の利害損得を強調しますから ここでは経済はともかく 医療制度やインフラ整備や国土建設等の国策や外交などの国家百年の計を決めるのは不向きです。自ずと このような国家の大計を決めるのは 色院 であって 両院の役割分担が必要になります。つまりそのためには 項目によって 両院に必要な決議のための獲得票の比率を変えることで 対応する事が出来ます。

そして国民の象徴としての天皇は民族文化の象徴として 主権者の 色 の統合の代表として存在します。しかも 色 は固有名詞で 或いは単数形で表された

ように 空から個性を持って別れた「多」であって 同時に「一」なる存在でした。

それを具体的に表現すれば 天皇は常に国家理念の中心にあり「一」の表現者となります。建国の歴史を重んじ 天皇としての天命を全うすべく「多」である国民一人一人と フラクタル共鳴を体現することを求め続けます。ここに日本国の国家理念として 独自性を大いに盛り込むべきと思います。

天皇は主権者の代表として その生涯を通して般若波羅密多の瞑想と行を継続し 空と一体の立場から 国民と共に フラクタル共鳴を常に保ち続けることをその使命として 世代を重ねてそれを成就していくこととなります。この天皇の姿は現実の天皇の姿とまったく違いはありません。

さらには 諸法空相の原理から 立法機関と司法機関と様々な行政機関の形式が許されますが そこには多様性の中に普遍性を保ちつつ フラクタル共鳴が維持されるのです。

さて ここでの問題は この国家理念を 受け入れない人達をどのように扱うかです。その人達は 政党を作り 理念を異にすることを明らかにした上で 色院への参加は許可され 一方色院への参加は 自らが政権を取るまでは許可されません。しかし 自らの国家理念を議論する公式の場が与えられ そこで常に議論し 同時にその理念とその行動を公表し続ける義務が生じます。その公式な場では 他政党からの質問を受けなければなりません。

そのことで その理念が常々の主張や行動と合致しているか 国民の評価に晒されることとなります。与党並みに その主張や行動が 理念と共に公に評価されることで 矛盾が指摘され 国民は今後 その理念を必要とするかどうかを選択することができます。

このような仕組みとすることで 国民は目先の損得ではなく 理念の大切さを学び その意見が理念そのものに反対なのか それとも体制へのフィードバックなのかを区別して理解し 判断することができる 深化した環境が整うのです。

さらに未来において 国家理念を他と交代する手段も許しておく必要があるでしょう。しかし これは革命に近いことですから 尚更 理念を明確にして 色院の決定と国民の大多数の指示がなければ成らないでしょう。

ただし ここで 国民とは今生きている国民だけではなく 既に亡くなった過去の人たちも そしてこれから生まれてくる国民の意見をも代表するモノでなければならないのです。もちろん 過去と未来の人の意見を直接聞くことはできないのですから その人達の気持ちを忖度した意見を組み立てなければなりません。

ただし ここに示した例であっても 現状からどのようなプロセスを踏んでそこまでもって行くのか についてはまだまだ議論の余地が残されています。

これは 日本の民主主義体制の改良の一例ですが このようなフラクタル共鳴を生み出す方向の改良が 近未来の行動原理となります。

【二院制の場合は改良しやすい】

日本のように 二院制をとる体制では 二院制をそのまま色と色とを分離したシステムに改良できます。色と色との二つの立場があり それぞれを分離して議論できることがこの新しい二院制なのです。

色と色を分離したことで 色院は思い切り自己の利害を主張出来る事になります。利害は利害として主張すればそこには嘘がないのですから 真理に沿っていると言えるのです。しかし よく有るように 自らの利害の主張であるにもかかわらず 利害を隠して 正義として つまり善として 主張してしまうと それは真実ではなく 嘘であり 従って 真理にもとります。利害を利害として主張する限りには それは嘘ではなく 真理に反することはありません。

そして 色院では 徹底して《宇宙の理念》に照らして フラクタル共鳴の下に有るように フィードバックとして色院を指導することになります。そこで それならば主権はどこにあるかということ それは空にあります。実際は空を現実而降ろした 空に等しい色にあり 不完全な色だけが直接主権を持つことは避けられます。

色も色も 本来はフラクタル共鳴状態にある存在であり フラクタル構造を成す自分自身ですから 主権が無くなったわけではなく 間違いなく 国民一人一人の良心の中にあります。

人間は本来 完全無欠な空に等しい色なのです。そこで 色を前面に出すことで 不完全な色の上に片寄ってしまうと 「個の論理」だけを際限なく追求してしまうことは避けられます。

色とは空と等しい「一」であり 同時に個性として別れた「多」です。この自分が 空という全体と一体の中から導かれる「全体の論理」の中に 個性を持つ色が 「個の利害」のみに傾く色と フラクタル共鳴を保ちつつ 個と全体を調和させつつ 《宇宙の理念》を具現化していくことになります。

さらに 形としての体制は 空相をフラクタル共鳴の関係に投影すれば良いのです。行政機構はまさにこの原理で構築することで フラクタル構造を形成し フラクタル共鳴を発する組織となります。さらに民間の機関もこれに準じます。企業も同じです。それが 《宇宙の理念》に共鳴するということです。

《宇宙の理念》 つまり世界観の解釈は基本的に共通で有るべきですが そこに至るには 世代を超えたかなりの時間がかかるでしょう。それは確かに困難な道程ですが それを目指して その成就を待つことには 十分な価値があることです。

ここで 世界の恒久平和が近づき 地球上の人類が理念において一体化するには 不完全な色が 人間の本来の姿である 完全な色にフラクタル共鳴するための教育や儀式が必要になります。教育は正しい世界観を教えることが基本となります。そのためには般若心経を教えるのが一番良いと思いますが 普遍性を回復した様々な宗教であっても良いことになります。

そのような宗教は 理念が近いほど 互いに交流も盛んであって良いし 理念が離れていけば 互いに距離をとることは仕方が無いでしょう。

それでも問題は残ります。それは 《宇宙の理念》を受け入れない人達を ど

のように扱うか です。この般若心経の世界観が唯一正しいからと言って 他に強制することは出来ないでしょう。この解決は 先ほどの 多元方程式に解があるのかどうかにかかっています。さらに もし 実質的にパラレルワールド化すればこれは解決します。まあ これはアイデアに過ぎないですが・・・。

ですから 結局は今暫くは 改良された民主主義の中に 新たな「理念」を落とし込む以外にないのですね。でも 一方では 多層化された文化圏を構築し その一つの層として この般若心経の世界観から導かれる理念と 行動方針をキッチリとまとめ上げ 実践の中で組み立てて 現実的な行動原理を生み出していく努力をしなければ成りません。この地上界は 自分だけで 他と関わりを持たずに生きていくことが出来ないのですから この理想は多層化された中の一つの世界として実現する以外にないのです。多層構造文化 これがこの地上界でのベースのルールになります。

一方で 世界の中で 自分以外の他の理念を一切認めない 「イスラム国」やその他の 五蘊皆空の現実否定に基づく集団は 自らの排他性によって崩壊するか 五蘊皆空の力によって排除されます。

その 排除される集団の色・受想行識としては 自ら管理する色・受想行識の崩壊を望むのです。ここでの重要な視点として 排除は 色・受想行識の意思であり 排除されるのは色・受想行識の意思から完全分離した 色・受想行識であるということになります。

このとき 五蘊皆空による強制排除する現実の力は「武の力」として 全宇宙によって全肯定されています。

それ故に 《宇宙の理念》に対する理解と フラクタル共鳴を体得することが 国民教育の基本となります。

もちろん それを観音様ではない 生身の人間が考えるのですから それを現実に反映する時には 完全に正しいはずはありません。その場合には 常に 真実との間には ギャップが存在していることを認めていて 常に 改良する姿勢を失わなければ良いのです。

確かに 《宇宙の理念》の理解度とフラクタル共鳴の体得度により個人の所属が決まります。ただし 自らの意志で所属を選択できれば 差別が発生することは少なくなります。

つまり 国民は自らの支持する所属 それが政党であっても その方針により分類されますが その分類は自分の選択で成されるので この点で色の自由意志は尊重されます。

人により 理念を実現するための方針に関して 異なる意見があるのは当然のこととして ある方針を掲げる政党への所属は 自由意志の選択であることから考えれば 分類され 階層化されていることが 《宇宙の理念》に反することはないのです。

ところで 色院では 完全な色の立場を現実の人間が執行するわけですから 特別の教育を受けなければなりません。そこで常に 色院に所属する人達は 自らフラクタル共鳴を求める修行を積むだけでなく 他の体制の色院との協

議を通じて 互いがフラクタル共鳴の関係により近づくことで フラクタル共鳴を維持することができます。

【マスコミの働きとフィードバック】

現代の自由主義の中では マスコミがフィードバックのための体制批判が自分たちの役割であるとして マスコミの人達は声高に叫びますが 私はそうは思いません。マスコミが体制批判をすれば それは当然のごとく 体制批判の立場をとる野党の主張に似てきます。つまり 政府から見ると マスコミと野党が同じような理念と 理想論的立場に立ち 一つになって 外交や防衛に関する政府の主張に対して 反戦平和 戦争反対 核兵器反対 防衛法案反対 などと論陣を張るのは まさに理念の異なる外国勢力にとっては 何ともありがたい 好都合な論調と映ります。

言論の自由は大切ですから 基本的にマスコミは何でも語れますが しかし マスコミの言うことが正しいとは限りません。しかも そこに嘘があれば それは犯罪になります。嘘を言いつばなしにならないように 常にその検証が必要です。白を黒と言ったことだけが嘘ではありません。情報の一部を故意に切り取ったとすれば それは紛れもない嘘です。

マスコミは言論の自由を守られて報道していますが 結果として国民の教育機関にも成っていることを重要視すべきです。

報道する側の自由だけではなく その情報を受け取る側の自由性も 担保する仕組みを作らなければ成りません。情報の受け手側の情報選択の自由が必要になります。そしてそれはマスコミではなく インターネットで実現されつつあります。しかし 報道にせよ インターネットにせよ理念無き 或いは理念を隠した情報発信は大変危険であるといえます。

そしてもちろん マスコミに限らず 情報を発信する立場には 常にそれなりの責任がついて回ります。常に嘘は批判され 重大な嘘は公に訂正される仕組みが必要です。一般のインターネットでの発言であれ 発言者を公表し 発言内容の背後の理念を自ら公表する習慣がほしいモノです。

それが無い発言は信頼が無いという評価が一般的になることが正常な言論空間といえるでしょう。

そして 批判のための批判はフィードバックには成らないことを既に話しました。その場合は 理念が異なるのであり 理念に反対なのであり これはフィードバックではありません。これは全否定なのです。

ですから 自らの理念を明らかにしないままの相手批判は 魂胆があると思われても仕方が無く 卑怯と言わざるを得ません。

また フィードバック機関のためのフィードバック機関を成立し 般若心経の世界観に立つ第三者機関がその発言者の理念を 一つ一つ位置づけていくという作業も必要でしょう。

マスコミが体制のフィードバックになるためには 体制と理念を共有していなければ成らないことは既に述べました。

ここでもし マスコミが普遍の世界観に立つことが出来れば すばらしい世界になるでしょう。しかし それは期待薄ですから 報道機関は自分達の理念そして情報発信者の理念を常に示し続け その理念の中での立ち位置を示し 先ず順方向の情報を正しく報道することが重要です。それが無ければまともな

報道機関ではありません。現実批判だけの理想主義とならないことを祈ります。

さて ここで順方向とは批判する対象の主張を相手の立場で 正確に示すことです。或いは ここは対象にすべてを語らせて 意味の変わる編集をしないことです。この趣旨は 偏向の禁止を意味し 情報を自らの理念で加工したり 一部を選択しないで バランス良く報道するという意味でもあります。それであれば 順方向の情報が一部欠落してしまい 或いは嘘が混入し 聞き手は正しい情報を受けることができなくなるからです。

もし批判対象の体制と 理念が異なるのであれば 理念の違いを明確にして つまり立場の違いを明確にして 議論する姿勢が必要になります。

理念を共有する上での フィードバックのための批判なのか それとも理念を異にする反対意見なのかを明確にする必要があるのです。反対は自由ですが 理念を異にしているのであれば それはフィードバックではないことを確認し その姿勢を明らかにしなければなりません。

ここでは 国の行く末を決定するような 重要問題を扱っているのであって 本質的ではない 程度の問題や どちらでもよいような枝葉の問題は 議論していません。

既に詳しく話したように フィードバックのためには 共通の理念と「真値」が必要なのでした。現実問題として マスコミが「真値」を持っているとの保証は一切ありません。「真値」を知らずして フィードバックをかけることになると 既に述べたように システムは却って不安定になってしまうのでした。

ですから 情報発信を扱うマスコミ自身にこそ 最も適切なフィードバックが必要になるのです。つまり マスコミのためにこそ フィードバックの機関が必要になるのです。理念を不明確にしたり 責任をとらない言いつ放しは一番危険であると知るべきです。

いかなるシステムにおいても 適正なフィードバックの為には 理念を明確に示し それなりの教育を受けた 「真値」を求めるための修行を真摯に積み上げた人でなければ その役割は十分に果たせないのです。

それ故に フィードバックの役割を果たす機関や人達は 最も世界観を正しく理解し そのための修行を積んだ 人間性が高い人達で構成しなければならないのです。

さらに もう少し突っ込んで話してみましよう。

【未来の行動原理は般若心経の中にある】

そして重要なことは 常に近未来の行動原理の答えの全ては ここに解説した般若心経の中に存在するということです。

そしてそれこそが人類の未来を構築する価値体系となるのです。このような人類が希求する価値体系と そこから導かれる行動原理とは 常に般若波羅密多の中に有ることが重要な認識です。

つまり 人類の恒久平和は 般若心経が現代に示している宇宙像をそのまま 般若波羅密多の中に投影することで実現します。

般若心経を理解した人にとっては そして普遍性を回復した宗教や文化の中

では 共通の世界観の下で 共通の土俵での話し合いが可能となりますから 人類の未来は 間違いなく明るいことを確信しましょう。

【フラクタル共鳴の深化を示すフラクタル深度】

自らが 般若波羅密多の瞑想と修行を極めることによって フラクタル共鳴の深化の度合いを評価することは可能です。私としては 様々な文化や国家や政治体制 宗教 組織 そして個人に対して この「フラクタル共鳴の深化」の度合いを示す「フラクタル深度」がどれだけ進んでいるのかについて今後も監視していきたいと思っています。

この「フラクタル深度」が未来の人類にとって 進歩と調和の度合いを示す有効な指標となるでしょう。

修行によって フラクタル深度を直感的に感じ取る事も可能ですが しかしこれは 客観的に幾つかの事実を選択し 解析し 分析することで 数値的に評価できる性質のものであると思っています。

ところで 「深化」ですが これをもう少し分かりやすく言えば それは「神聖さ」です。

独善には決してならない 普遍的な人類愛に裏付けられていて しかも人格を越えた 超越的な宇宙的神聖さの方向こそ フラクタル共鳴の深化の方向なのです。

おわり

引用文献

文献一 般若心経とは何か 仏陀から大乘へ
宮元啓一 春秋社
二〇〇五年二月二十日 第四版

般若心経の解読は深化し続けます。

深化に応じて 本文はしばしば更新されます。

[献文舎Kembunsha] にアクセスすれば PDF原稿を入手できます。